

09

名古屋学芸大学「環境デザイン論」
実践報告①

デザイン活動の前提となる環境意識醸成をめざして

Teaching Reports on The Environmental Design
in NUAS1. Raising Awareness of Environment as Introduction to
Designing Activitiesデザイン学科・非常勤講師
Department of Design・Part-Time Lecturer

山田 厚志 Atsushi YAMADA

1 はじめに

1.1 かたちの三角構造

筆者は名古屋学芸大学で「環境デザイン論」を担当している。この授業には例年、デザイン専攻の3年生30名ほどが水曜前期に集まってくる。

大半の学生たちは予め「環境」とか「デザイン」という用語について特に見解を持ち合わせてはいない。無論、学生たちはこの授業に出会う以前に日常的に「環境」や「デザイン」という言葉と接してはいるが、多くの場合、それは各種デザイン制作の授業の課題にあらかじめ含まれた「所与」の言葉として、である。つまり彼らは各々の捉え方で「環境」や「デザイン」という言葉を解釈して「かたち」を産み出してきたのである。

かつて建築家・菊竹清則は、人の産み出す「かたち」の構造について「か」「かた」「かたち」なる語を用いて著書『代謝建築論』の中で論じている。(*1)

筆者の拙い解釈によれば、その主旨は『人が産み出す「かたち」は、「かた」(型・技法・技術)によって実現され、そのかたちには「か」(考え・コンセプト・思想)が込められている』というものだ。換言すれば『人は、自らの考え(か)を自らの技術(かた…必ずしも手わざに限らず)を用いて、自らの表現として実現(かたち)する』のである。(図1)

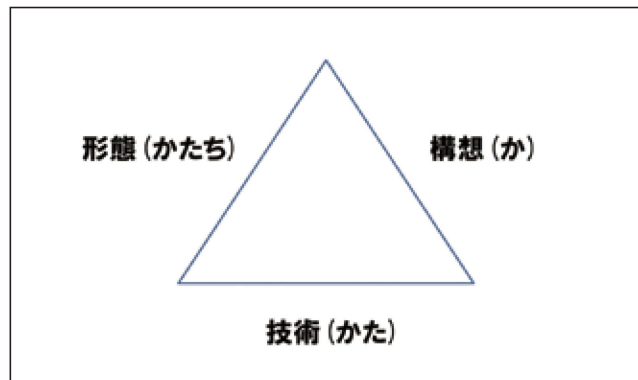


図1: かたちの三角構造

1.2 『「か」あって「かた」・「かたち」足らず』であれ

筆者は担当する「環境デザイン論」の実践を通じて、学生たちの「環境」や「デザイン」についての「か」(考え)が少しでも深まり、彼らが産み出す「かたち」により良き変化が生まれることを強く願っている。学生たちには『「か」あって「かた」・「かたち」足らず』ぐらいであってほしい。たとえ今は「かた」や「かたち」が未熟であつても、「環境デザイン論」を契機に自ら環境やデザインの意味について考える力を鍛え、合わせて大いに技術も磨いて近い将来の自らの「かたち」に反映してほしい。

本論はそんな願いを抱く筆者の複数回にわたる予定の実践報

告である。本稿はその初回であって、授業で言えばガイダンスの如く各論に入る前に受講した学生たちに語る概説的な内容になることを予めお断りしておく。

2「環境デザイン」をどう捉えるか

2.1「いきなり環境レポート」

冒頭に述べたようにこの授業に臨む学生たちの多くは、特に「環境」や「デザイン」という概念についての確たる見解を持ち合わせてはいない。筆者は、初回授業の開始早々に以下のレポートを課すようにしている。(写真1)

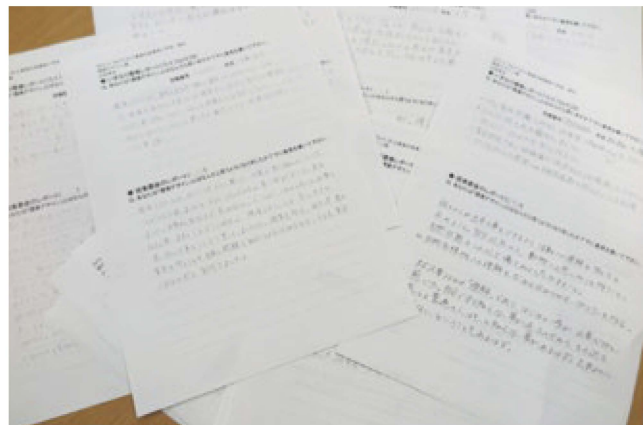


写真1:「いきなり環境レポート」

A4縦の用紙を上下二段に区切り、上段を「いきなり環境レポート」、下段は「授業最後のレポート」と名付けて「あなたは環境デザインとは何だと思いますか？」と、同じことを初回と最後の授業時に尋ねるこのレポートの意図は、言うまでもなく学生たちの考えが全15回の授業を通じてどう膨らんだかを知る手掛かりを得るためである。ここでは代表して3人の学生のレポートから(初回時)と(最終授業時)の記述内容の変化を見てみよう。

■レポートテーマ:

「あなたは環境デザインとは何だと思いますか？」

(初回時)

「シャッター街を再活性化すること」

「集合住宅をデザインすること」など複数列記

(最終授業時)

「まず必要なことは理解であり、はじめの一步が必要だなと感じた。自分ですら知らないことがあったのだから、普通の人はもっと知らないことがあるはず…。」

(以上、3年女子)

■レポートテーマ:

「あなたは環境デザインとは何だと思いますか？」

(初回時)

「デザインの中で一番大きなくくりで、ビジュアル、プロダクト、スペースの全てが関わるものであると思う。都市や公園など、より快適な生活をおくるために必要不可欠なもの…」

(最終授業時)

「環境デザインは、ただ都市として、環境としてのデザインかと思っていたが、講義を受けていくと生態系や大気汚染、温暖化など様々な問題と共に成り立っているものだ気が付いた。ただ美しい街を創るとか、住みやすい環境をつくるというような簡単なものではないと知った。」

(以上、3年男子)

■レポートテーマ:

「あなたは環境デザインとは何だと思いますか？」

(初回時)

「私が考える環境デザインは、自然環境と都市とを関わらせたデザインなのではないか、と思いました。もしくは、都市環境といったある程度の範囲をより良くするためのデザインだと思います。」

(最終授業時)

「はじめのレポートで書いたく自然環境と都市とを関わらせたデザインも環境デザインだったということが分かった。身の回りにある全てが環境デザインに関わっているんだなと思った。」

(以上、3年女子)

ここで重要なことは、彼らが授業を通じて環境に関連するさまざまな知識を習得し、「環境デザインとは」という問いに明快に答えられるようになったわけではないことである。むしろ明快とは正反對の「慎重さ」ともいうべきものがその行間から読み取れる。つまり彼らは15回の授業を通じて「知れば知るほど知らない自分を自覚」していったのである。これは環境保全の意識が希薄なまま「闇雲につくこと」へのある種の「怖れ」の意識が彼らの中に生まれたことでもあると筆者は考えており、その兆候を好ましく評価もしている。

『宇宙に外側はあるか』という刺激的な内容の著作の中で松原隆彦(名古屋大学)は、宇宙科学の研究が進めば進むほど知らないことが増えてくる現象を「知識の球」という概念で説明している。(*2)

松原はそれを『…理解するときの進歩はよく、だんだんと膨らんでいく球にも例えられます。(図2)球の内部が私たちの理解してい

る範囲です。…私たちの理解した範囲が大きいほど、未知の領域に接する面が広がっていきます。この「知識の球」の例えにより、私たちが宇宙について知れば知るほど謎が深まる、ということの意味がわかると思います。』(同著P7)と、述べている。

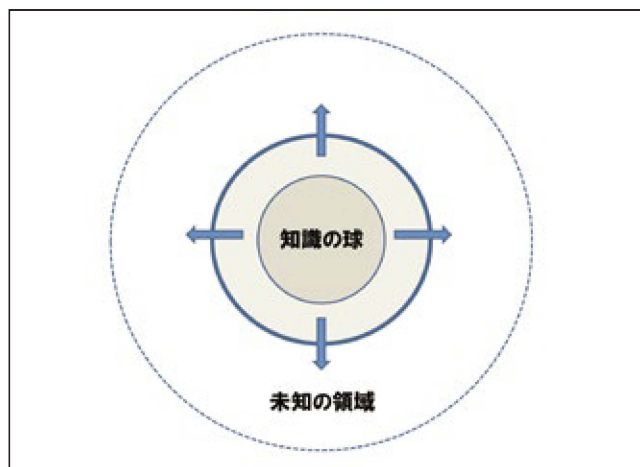


図2:「知識の球」模式図…知識という球体が大きくなるほど「未知の領域」と接する表面積も大きくなる

「環境」や「デザイン」に対する知識もまた同様であると筆者は考える。知れば知るほど自らの知識の量は膨らんでいくが、それに伴って未知の部分に接する「知識の球」の表面積も広がっていくことから、自ずと知ったことの「過信」よりもまだ知らぬことへの「留保」や「恐れ」が学生たちに芽生えてくるのであろう。つまりそれは彼らが「正しく学び始めたこと」を意味している。

なおついでながら、筆者はレポート用紙の書式についてもこだわりを持つ。もし仮に「学生たちが主体的に取り組む意欲が湧くレポート用紙」があるとすれば、それを研究・開発することも大学でデザイン教育に関わる者の務めの一つであろう。この授業では前述した「いきなり環境レポート」以外にも、いくつかのオリジナルなレポートを課している。(写真2) それらの中から「なごや環境ハンドブック・イモヅル式レポート」(写真3)については本論の2回目以降に詳述するつもりである。

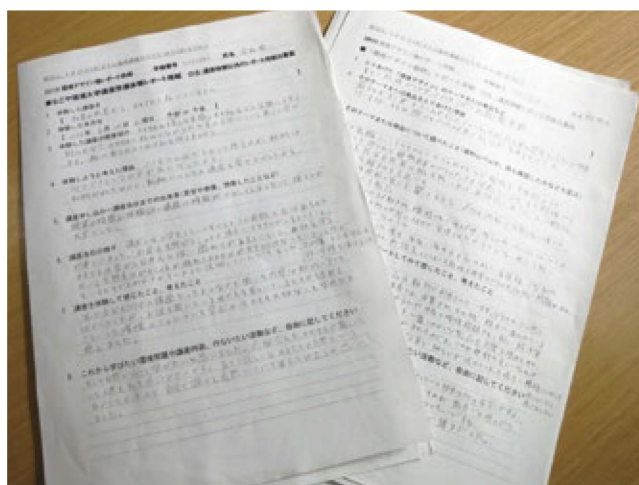


写真2:オリジナル・レポートの一例

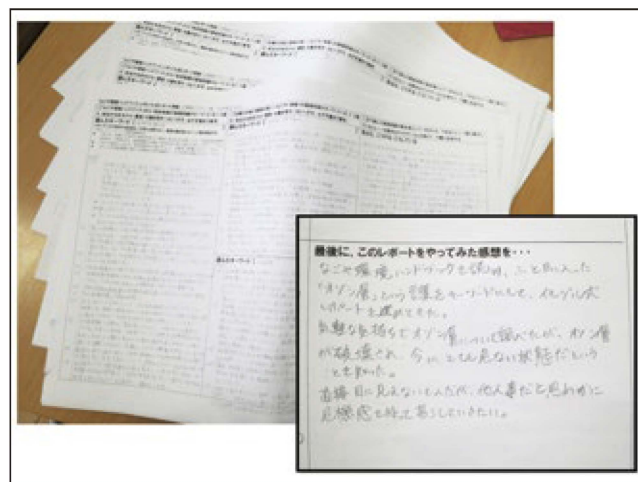


写真3:「なごや環境ハンドブック・イモヅル式レポート」

2.2 環境デザインの基本的概念を知る

上述した初回時のレポートのように、多くの学生たちにとって「環境デザイン」とは、ある特定のデザイン領域として捉えられているのだが、私はそれを「小さな環境デザイン」と名付けて学生たちに早い段階で説明するようにしている。すなわち「ビジュアルとかプロダクトとかデザイン領域は時に区分されるが、同じように、ある環境をデザインする場合には、それは環境デザインと呼んで構わない。」と話した上で、そのような「デザイナーにとっての創作対象となる環境デザイン」を「小さな環境デザイン」つまり「狭義の環境デザイン」と、この授業では定義している。

なお、当然ながら「小さな」「狭義」のいずれもデザインの価値の大小を意味しない。「ビジュアルデザイン」や「プロダクトデザイン」などと同様に「環境デザイン」という特定の領域を指すという意味で使う表現にすぎない。

一方、「あらゆるデザイン活動に先だって地球や地域の環境保全に考慮したデザインは全て環境デザインと呼び得る」とも話し、それを「大きな環境デザイン」と名付ける。このことによって特に平面系デザインを専攻する学生たちが無自覚に自分のデザイン活動とある距離を置いて「環境デザイン」を捉える意識を払拭することが期待できると考えている。(図3)

- ◆狭義の環境デザイン (小さな環境デザイン)
…デザイナーにとって創作対象となる環境デザイン
- ◆広義の環境デザイン (大きな環境デザイン)
…環境保全を意識した全てのデザイン活動

図3:「狭義の環境デザイン」、「広義の環境デザイン」

2.3 より自覚的な「インテリア・デザイン」とは

ドイツ語で環境を表す言葉は「ウムベルト(Umwelt)」と言う。この言葉の概念は「自分の周りの全てのもの」といったイメージである。すなわちどこにも「仕切り板」のない漠とした空間概念がウムベルトなのである。そこには内も外もない。

方や日本には、一般的な呼び名としてインテリア・デザイン、エクステリア・デザイン、すなわち「室内デザイン」と「屋外デザイン」という分野があるが、デザインを学ぶ学生たちがその日本語のイメージに囚われすぎると「環境」もまた「うち」と「そと」で切り分けて捉えてしまう恐れがある。

英語圏の国々の人にとって「環境」に基本的に分け隔てがないことは、interiorとexteriorと英語の綴りが、共に「-rior」という比較級であることから類推できる。つまり主体にとってより「うちのなもの」がインテリアであって、その「そと側」にあるものがエクステリアというわけである。このように環境の空間区分とは絶対的なものではなく、主体の意識の持ち方によって相対的に対象や領域が変わることとを留意すべきである。

学生たちにはよく「自宅」と「自分の部屋」の例を示す。自宅とは戸外との対比において「インテリア」であることは誰もが認めるところであるが、その一方で自分の城である「個室」との対比においては、たちどころに自宅も「そと化」してしまう。逆に言えば、自らの暮らす地域を「うちの」に捉える意識があれば、そのエリアを超える空間からがエクステリアとなる。

こうして「うち」と「そと」の関係を拓いていくと、最終的には「地球」という宇宙に浮かぶ天体が巨大な「インテリア」となり、それを取り巻く宇宙空間が「エクステリア」となる。この「入れ子構造」ともいうべき「うち」「そと」の関係に最初に気付くことが、「宇宙船地球号」(*写真4)と呼ばれる自分たちの星の環境を学生たちが「我が事」として捉える意識の芽生える瞬間である。そしてそれは、「環境デザイン論」が「地球環境インテリアデザイン論」の別称でもあることを自覚する瞬間でもあると、筆者は捉えている。



写真4:「宇宙船地球号」…地球は宇宙に浮かぶ独立した「うち」環境。
「そと」からの恩恵は太陽エネルギーのみで、私たちは「うち」環境を改変しながら持続可能な発展をめざす世代的責任を負う存在である。

3 環境デザインの活動領域とその可能性

3.1 環境の「保全エリア」「保存エリア」

前章の-2、-3で見た通り、本学で学ぶ「環境デザイン論」では、全15回のごく前半で【狭義・広義の二つの環境デザイン】【地球を「うち化」する意識】についての学生たち自らの気づきを大切にしている。そのことが広義の環境デザイン論を学ぶ出発点になるし、あとに続く授業に主体的に参加するためのモチベーションにもなるのである。

次に、近い将来に「職能としてのデザイナー」をめざす学生たちに、その活躍の舞台となる環境エリアについて、筆者は以下の概念を提示にしている。

すなわち地球環境を「保全(Conservation)エリア」と「保存(Preservation)エリア」という、わずか二つの空間領域に区分する概念である。(*3)

この概念の源流は1992年6月にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された「地球サミット」と呼ばれる環境会議にある。この会議では来るべき21世紀の行動計画として「アジェンダ21」が国際的に合意された。

「アジェンダ21」では、人類の持続可能な発展に向けて「温暖化の抑制」「ゼロ・エミッション」「リサイクルの促進」「人と自然の共生」「自然資源の賢い利用(ワイズ・ユース)」「Think Globally, Act Locally」など今日の環境意識に繋がる数々の重要な概念が示されたが、これらの概念を反映してデザイナーが活躍可能な地球上の空間領域は「環境保全エリア」に限定されるという点が重要な学習ポイントである。さらには「この地球上にはデザイナーの利用可能な環境保全エリアと、手を出してはいけない環境保存エリア、この2つの空間領域しかない」という環境意識の共有化を筆者は授業時の重要なねらいとしている。(図4)

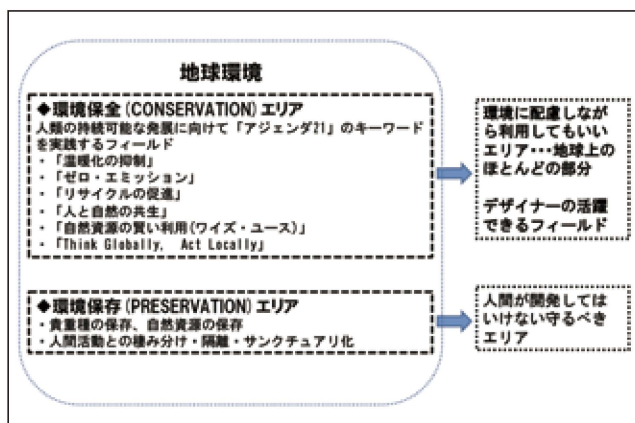


図4:「環境保全エリア」と「環境保存エリア」

授業では「この教室も環境保全エリアです」と学生たちに伝える。つまりは私たちが暮らす日常的な空間に「無分別な開発を許す特別なエリアは皆無」で全てが環境保全エリアであり、このエリアでの「ものづくり」には前提的に「持続可能な発展を考慮したデザイン活動」が求められることの自覚を促すのである。筆者は、本学の全ての学生たちが近い将来にはデザイナーとしてごく当たり前に環境保全の具体的な提案が込められた「ものづくり」に取り組んでほしいと切に願うのである。

3.2 広がるデザイナーの活躍のステージ

無論、筆者の展開する「環境デザイン論」は、デザイナーの活躍の場を狭めるものではない。健全な環境意識を持たず無自覚な環境破壊に加わるデザイン活動の愚を戒め、ガイダンスに続く授業では環境先進事例を数多く示して環境保全の取り組みにデザインの果たす役割の拡がりを実感してもらう。

例えば「行政の環境施策にデザインの果たす役割」について、筆者が取材した国内・国外の諸都市の取り組みを学生達に紹介している。その一例を挙げれば、国内では名古屋市環境局と本学をはじめとする大学生達の協働活動がある。(写真5)



写真5:名古屋市の主催する「環境デーなごや2015」会場での大学生の活躍の様子

大都市が抱えるさまざまな環境問題が次世代の生存権にも関わるリスクを有するだけに、行政担当者は若い世代に環境問題に対する興味関心を喚起したいと強く望んでおり、とりわけ主体的に問題解決の「ひとつのかたち」を示すことができる広義の環境デザイナーの登場を待望している。行政の策定した環境諸施策を読み解き、広く親しみやすい表現によって啓発効果を最大限に高めるデザイナー、あるいは大規模なエコイベントの企画・運営やブース来場者が取り組む参加型のエコ工作教材を開発できるデザイナーなど、デザインを学ぶ大学生達の潜在的な活躍の舞台は広く大きい。(写真6)

筆者は近い将来には名古屋市や本学の立地する日進市など自治体とデザイン科の学生たちとの継続的な協力体制を構築す

ることをめざしており、それが実現すれば環境デザイン論の授業の一環として行政の各種広報活動を支援するといった魅力的な協働が生まれてくると期待している。



写真6:「環境デーなごや」会場で活躍する大学生たち

また別の例を挙げれば、富山市の公共交通システムとデザインの間わりも興味深い。

富山市は、平成10年代に北陸新幹線建設に伴うJR富山駅周辺の再整備にあたって、当時、減少に歯止めがかからなかった富山港線を廃止や高架化ではなく、敢えて路面電車化して結果的に大きな成功を収めた。公共交通システムを活かした新たな都市魅力の創出という意味でも内外から高い評価を得た当時の市長はじめ市や関係者の決断は敬服に値するが、その試みの成功にはデザインの力が大きく寄与していると筆者は評価している。(写真7)



写真7:富山市を走るポートラム…周辺景観をリードするスタイリッシュなデザインの路面電車がJR富山駅に直接乗り入れている。

たとえば7色に彩られたポートラムと呼ばれる車両デザインは、車両コストの制約と性能や快適性を高い次元で融合させているし、さらにはJR富山駅への路面電車の乗り入れや停留場でのバスとのスムーズな乗り換えといった優れた利便性の実現、そして既存の道路空間に巧みに路線スペースと架線を組み入れた手法など、随所に「システムとしての環境デザインの勝利」を垣間見ることができる。(写真8)

ここではデザイナーの仕事は単にモノのデザインに留まっ

読解力、そしてなによりチームで取り組むデザインワークの高いハンドリング能力などが問われる。まさに都市環境をトータルで考える「広義の環境デザイン」のショーケースのようであり、学生達には将来の活躍の可能性を期待させる格好の事例と、筆者は考えている。



写真8: ポートラムの線路と架線…ポータームに関わるデザインは単にモノに限らない。都市における公共交通システム全体のデザインに成功しており、富山市では現在、ポータームに続いてJR富山駅南側の市街地を巡る「セントラム」も新たに営業している。

また国外に目を転ずれば、さらにデザイナーの活躍の幅を広げる刺激的な取り組みに事欠かないが、具体的な実践事例は次回以降に紹介することにして、本稿では欧州の一例だけを以下に掲載しておこう。



写真9: ドイツ環境首都フライブルク市を走るラッピングされたトラム(路面電車)
…デザイナーによって車体全面に「都心までトラムを使えば326人を運ぶことができる。渋滞を引き起こす自家用車では、わずか数人。あなたはどちらを選択しますか?」と市民の主体的判断を促すメッセージが描かれている。

4 初回の結びにかえて

従来までのデザイン学習ではフィニッシュワークのレベルが高い学生の評価が自ずと高い傾向にあった。その結果、菊竹(前出)の言う「か」にこだわりを見せつつも「かた」や「かたち」が追いつかない学生はデザイナーへの道を断念するケースも筆者は見聞きしてきた。これはいかにも惜しい。

今後は、「環境デザイン論」を学んで環境意識を鍛えた学生たちが自らの「か」を補強して、従来までデザイナーとの関連が薄いと思われた業種や領域にまで積極的に進出し、人類の持続可能な発展につながる素晴らしい「かたち」を産み出していくことを心から願って、本論の初回となる稿を閉じることにしたい。(了)

引用・参考文献

[*1]「復刻版 代謝建築論」菊竹清則 彰国社

[*2]「宇宙に外側はあるか」松原隆彦 光文社

[*3]「市民からの環境アセスメント」 島津康男 日本放送出版協会